



法眼鏡
一法眼鏡



13
1660
1



1660 1660

新巻

一、つ、砲、て、張、出、け、結、ゆ、さ、の、表、張、が、七、の、た、具、
女、遠、て、い、け、と、い、鬼、渡、る、色、の、跡、に、排、ぬ、霧、士

僕年若

鬼一法眼虎巻

種茶考

板付

身、心、の、ま、の、ま、大、種、園、果、花、は、病、瘴、の、毒、に、初、後、
驚、か、せ、も、色、の、易、ら、ぬ、若、誓、の、松、の、三、階、は、大、海、に、嫁、入、

三木



序

張、良、黃、石、が、符、の、受、て、三、略、の、院、と、備、一、七、
以、く、郡、雄、の、游、真、言、水、を、い、く、石、投、が、如、
さ、し、を、ま、あ、い、は、し、漢、祖、の、遺、に、及、ん、で、其、言、
石、の、水、投、が、如、く、こ、の、送、る、の、は、し、と、
く、我、朝、の、た、う、以、漁、義、朝、と、れ、八、男、年、若、丸、の、
鬼、一、法、眼、が、秘、す、る、所、の、虎、乃、表、を、排、ぬ、霧、士

智とて獨其謀を受入るもふとて
 かし投入はがぶく定一古今未嘗有の
 良將の軍略一考く由る取紙今
 異々著述るものなりと

作者

其續



享保十八年神皇



鬼一法眼虎の巻

巻之一

目録

第一 忠義の公物子掃り八相踊

栄花は杯樂の八条よ嘆きの振袖
 階子のさゆぐみ化の七之れ杭付
 金様小押つる葉の物薦借の終者



才二

平陽守とて返居する者の細解ぬい

平家の鍬とけもの伏門を乃細の森

あふしと後服の中と人通くれト

親のる少男を瓜さの敵の娘の種の小僧

才三

娘の先を前鬼が守ふれト入

染い出ぬかいつお家とんてい角を鬼衣

懐胎と母の推い喜梅を好む魚乃娘

悪び男ハるい仙舟の書志とて行ト路

一 忠臣のか拍子揃たり八朝踊

惣く世間憂喜展眺の形勢。若くや見又現るやいん。

今いづれぬおひきいれども。平家の愛人源氏の喜人。とらび

人慈く是皆人。世の分所をすくす。は。相もた。た。た。

義朝の自。悪を情の替。若京の信。頼。ゆ。と。ん。を。合。を。お。家。

を。亡。か。さん。と。金。持。い。り。た。報。敵。の。名。を。の。り。り。お。ひ。り。ゆ。ん。

忽一戦。打。負。ま。い。平。治。二。年。正。月。三。日。尾。羽。列。陣。名。の。内。海。

は。く。お。傳。の。家。系。長。田。が。る。ま。討。ら。し。て。裁。せ。れ。給。ひ。て。り。

平家の武威。あ。ま。り。て。平。氏。の。棟。梁。津。並。と。内。名。長。小。藤。あ。

がり。公。の。後。の。後。一。門。の。繁。栄。目。さ。は。り。く。そ。ま。え。く。り。ご。は。り。

只。聞。く。の。源。氏。等。の。安。の。こ。に。隠。れ。ぬ。首。を。持。お。と。考。え。す。

後一かす喰つたのむ枝先開くまらしての枝まままきくも根
も松枝とめて花匂い色艶されぬむ窓に寂実として後さよま
をさうぞぶくたぶみ候ひし候に世まる活世のさほこそせむされ
はれ袖杖中の上目。まさ中家の所長のとて火とてや東み東の標の上。
むす男女遠目よほ異さひらけん毎年ん事あつ。そ文字の考う又
るま強ちおほの二子のんまわいんばいゆひしてまぢあつくして
んまんとおほじ。お蔵川のさか入んと。爪やあひさそのまに。強まんあ
しひたらんばしあしつほのほ里よりさかたる。あくの所長目よ
こそそやねおゆり。割合量湯の量。あけほのほ窓の欠一進標生
まの葉葉売の葉もつはれは殿と隣に秘めす。まゆあむ町つ
はとの燈を推灯舟の林のよ。あしほ衣の踊子あつはそ又たの
まにづりむ代紙が七足つといつてれもあつるぞ。内志はほむら
ま

天下と雲の中は極うほひつる世の誰とけはあらず。人のわざなりとも
くろむど。雲のゆるりゆるりあつるふとこの懸。町の踊の神と人路
て押し乃るゆるりゆるりあつるふとこの懸。町の踊の神と人路
免切まいとせよ。い井下向小泥柱の杖の曲。産神おひらりんの
神と付し指のせりゆるりゆるりあつるふとこの懸。町の踊の神と人路
られ。年中はよの風女あつる踊振もあつる。見おひまれ。あよへの町と
へあよれりるゆるりゆるりあつるふとこの懸。町の踊の神と人路
細志とれい地の踊子も足あつてそぞよあひの踊子。古波屋の売とて
一條とらして結核のあふ。そよまてんよあひれあつ。古波屋も候ん
這おりの縁とめめておせ入ね娘とて。修治子氏の踊子たいらつてい
とてぬ。そよまてんよあひれあつ。古波屋も候ん
面いり村一七との梳も。尾とあつて返もする。八月朔日の夜。あふあふのた

今頃よりしては、兼のいふをて、兼のわが人、兼がわが人を
 兼のさかすまかた、兼のさかすまかのいは、兼のさかすまかのいは、
 兼の信人の身、兼の信人をと個人を兼をもとめ、兼のさかすまかの
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の
 兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼のさかすまかの、兼の

ナリ身より兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の
 兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼のいふをて、兼の



了かの
さうあん

は長刀の
もにん
原那のぶん
ひくろ
若すいごころ

鬼夜が終本の何げ
より好むはなを
了か初しはなを

そはハ
うきあ
好む

鬼の巻



吉の
里

女の信もき
つはんかき
くろし

女あんの
みい
七年の
さかん

女辰次

うき
あ

鬼の巻

つらふがよの舞の中へゆいどひにまはくとゆり。昔は世の中はゆい來
とありびとやうにゆいゆい。君もよのまにゆいゆいである。おまをさると力を
押し。おまをさると方ともひて。びとがゆいゆいがまはるとゆいゆいとまは
昔は世の中はゆいゆい。君もよのまにゆいゆいである。おまをさると力を
押し。おまをさると方ともひて。びとがゆいゆいがまはるとゆいゆいとまは
昔は世の中はゆいゆい。君もよのまにゆいゆいである。おまをさると力を
押し。おまをさると方ともひて。びとがゆいゆいがまはるとゆいゆいとまは
昔は世の中はゆいゆい。君もよのまにゆいゆいである。おまをさると力を
押し。おまをさると方ともひて。びとがゆいゆいがまはるとゆいゆいとまは
昔は世の中はゆいゆい。君もよのまにゆいゆいである。おまをさると力を
押し。おまをさると方ともひて。びとがゆいゆいがまはるとゆいゆいとまは
昔は世の中はゆいゆい。君もよのまにゆいゆいである。おまをさると力を
押し。おまをさると方ともひて。びとがゆいゆいがまはるとゆいゆいとまは

ちかづけて。ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは
ゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまはとゆいゆいとまは

あまの

あまの

